

松岡圭祐

Keisuke Matsuoka





松岡圭祐

Keisuke Matsuoka

煙

徳間書店

●松岡圭祐（まつおか・けいすけ）

1968年12月3日生まれ、愛知県出身。小説デビュー作『催眠』がベストセラーになる。以降『水の通う回路』、大藪春彦賞候補となった『千里眼』、『千里眼/ミドロの猿』と続く。2000年東映系公開の『千里眼』映画化作品で脚色原案と制作顧問を務める。

松岡圭祐

煙

*

2000年3月31日第一刷

発行者 徳間康快

発行所 株式会社徳間書店 〒105-8055 東京都港区東新橋1-1-16

電話 (03) 3573-0111(代表) 振替00140-0-44392

印刷所 ㈱清菱印刷

カバー印刷所 近代美術㈱

製本所 大口製本印刷㈱

〈編集担当 本間 肇〉

© Keisuke Matsuoka 2000

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。
落丁・乱丁本はお取り替えいたします

ISBN4-19-861153-X

煙

◎目次◎

正逆	地雷	庭園	過去	出逢い	鏡餅	追憶	別れ	儼追	風前の灯
157	139	111	91	77	66	47	33	18	5

あとがき	風	神人	現在	志願	暗闇	理由	奉安殿	再会
285	277	254	237	226	213	209	178	172

もしイタケーに帰り着いたなら、我々は子を産んでいない牝牛の中から最高のものを館の中で犠牲として捧げ、更に犠牲の祭壇の炎を素晴らしきもので満たそう

ホメロス『オデュッセイア』第十一卷より

風前の灯

板張りの床はまるで氷のようだった。正座していると、むきだしのむこうずねから体温が奪われていくのがわかる。薄暗かった。陽が落ちたいま、松明だけが辺りを物憂げに照らしている。二月。底冷えだった。鳥肌が立つ。感覚が喪失していく。厳しい寒さだった。この薄っぺらく頼りない白装束が、せめて膝下まであればと思った。

過酷な状況を頭から閉めだそうとした。視線をあげた。天井をみあげた。屋根に張りめぐらされた梁、それをみつめた。徳川初期の建立だという。切妻造で、内側に柱が並立している。昭和三十年には国の重要文化財に指定されている。みごとに細工だった。

上京し、大工の仕事をしていたころを思いだす。そのころには大工はかなり電氣化されていた。釘を打つよりも電動ドライバーでビス留めするほうが手に馴染んでいた。手びき鋸の代わりにチェーンソーを使っていた。半纏など着ていなかった。一世代うえの親方は、酒がはいるといつもそのことを世界の終焉のごとく嘆いた。伝統的な木材建築のよさをくどくどと説いた。日本っ

て国はな、温暖で雨も多いせいで、森には刈りきれないほどの木があるし、その種類も多様ときてる。つかわなきやばちがあたるつてもんだ。そうだった。あの親方が、昨今流行りの環境保護の主張とどうぶつかるか一見の価値はあった。しかし、それはもう叶わない。親方はずいぶん前に亡くなった。田舎にひっこんでから、その報せをきいた。かなりの歳月がながれた。どれくらいだろう。二十四年、いや二十五年か。四半世紀。その言葉がまた寒気をもたらす。歳のことを気にするたちではない。それでもいまは気になる。体力がおちている。タバコの吸いすぎか、肺がときおりきりきりと痛む。若者とぶつかりあえるだけの自信がない。歳をとった。そう、自分は衰えた。

「榎木さん」呼びかけられて、ぼんやりと我にかえってきた。声はくりかえされた。「榎木康之さん」

榎木は視線をさげた。目のまえに女が立っていた。白衣に赤い袴姿。巫女^{みこ}だった。巫女は盆を差しだしていた。盆の上には、高さ十センチほどの木製の筒が六、七本、載せてある。

とまどいながら巫女をみた。巫女は、榎木以上に当惑した顔をした。まだ年端もいかない女の子だった。日が浅いのだろう、手にした盆が小刻みに震えている。

榎木は自分の左側に目をやった。自分とおなじ白装束に身をつつんだ男たちが六人、並列に正座している。ほとんどの男は、榎木よりもずっと若い。そのせいか、見知らぬ仲であっても同世代に漂うような、ある種の親近感^{きんしんかん}は微塵にも感じられない。仏頂面をこちらに向けて、巫女の手もとと榎木の顔をかわるがわる見くらべている。

右側をみた。こちらにもふたりの若い男が正座していた。やはり、若者が中年に向けがちな、

いらだたしげな目が榎木をとらえていた。そのうちひとり茶髪だった。自分が大工をしていた年齢より若いようにみえる。ただ、事実は判然としない。最近は何れもがひどく若い。というより、幼い。茶髪の男の耳たぶにピアスの跡がみえた。そのくせ、身体は鍛えているようだった。白装束からのぞいた胸板は、細身の身体からは想像できないくらい厚かった。これが最近の若者なのだろう。身体はストイックにみえても精神は子供のままといい。

むろん、自分に彼らを批判できるわけがない。榎木はそう思った。なにをすべきかまったく把握できていない。かろうじて、右側のふたりの男が筒を手に行っているのが目にとまった。左側の男たちは、なにも持っていない。全員に一本ずつ配っているのだろう。

だが、どれをとればいいのか。筒はどれもまったくおなじ形状をしている。それでも七本が均等に並んでいるのではなく、二箇所抜けているところがある。たぶん、自由にとっていいのだろう。手をのばして、一本をつかみとった。

ふいに、周囲に緊張が走るのを肌で感じた。榎木は凍りついた。横目でみると、男たちの表情に陰悪のいろがひろがっている。

どうするべきかと迷っていると、巫女が小声でなにかささやいた。

「え」と榎木はきいた。

巫女は困惑しながら、声のトーンをあげた。「おじぎを」

神前だった。お参りなどほとんどしたことがないが、仕来り^{しきたり}があるのだろう。筒をもとに戻した。参拝のときとおなじだろうか。二度、深く頭を下げた。まさか二拍手は必要あるまい。そんな音がしたのなら、さすがに自分も気づいたはずだ。筒を無作為に手にとった。こんどは巫女も、

なにもいわなかった。これでよかったのだろう。ただ、どうも間が悪い。そう感じた。巫女はまだ、自分の前に立っている。もういちど、深くおじぎをした。巫女の足が、隣りへ移動していくのをみた。正解だった。

自分が持ちあわせている勘というか運というか、そういうものはまずまずだった。ありつたけの幸運がほしい、そう感じて挑んだ場だったが、ひどく心もとない。集中力については、いわずもがなだった。

ほかの男たちを見た。ここが厳肅な場であることを十分認識している。正座にしろ、この気温のなかでの薄着にしろ、まったく応えていない。だれもが二度の礼と、筒をとったあとの一礼をそつなくこなす。余念がない。

当然だった。彼らはみな、隣近所の期待を一身に背負い、ここに集っている。神人しんのびとに選ばれること。それは生稲市に住む男にとって最大の名誉とされていた。少なくとも、ここはそう信じた人間の集まる場だった。

古くからの因習が、この地には深い根をおろしている。二〇〇一年。今年も例年どおり、祭は執りおこなわれる。

榎木はその数字の意味を考えた。神社で西暦を思い浮かべる、それも妙な話だ。祭の意義を軽視しているのかもしれない。深い歴史にも、特に感銘は覚えていない。歳月を経ている、ただそれだけだった。

大学時代、名古屋の納屋橋なやばしで映画の看板を見かけた。『2001年宇宙の旅』。あの映画を観ていれば、多少の感慨もあつただろうか。たぶんいまと変わらなかっただろう。そう思った。あの

ときは結局『黒部の太陽』を観た。その内容も、やはり記憶にない。

榎木は醒めていた。場違いだった。信条も年齢も、神人にふさわしくなかった。しがた中年がこの場に存在する、そのこと自体、浮いて見えるだろう。斜に構えた気分ですう思った。五十をすぎて神人になることを希望する物好きは、そうはいない。二十一から六十一までの男性ならだれでも志願できるが、ふつう名乗りをあげるのは三十代以下だ。

とはいえ、今年に限っては、この世代の候補者は榎木ひとりだけではなかった。

最後のひとり、左端の男に巫女が近づいた。榎木はその男を見た。背すじがまっすぐに伸びきり、顎をひき、両手を膝の上に置いて微動だにしない。緊張するばかりの若者たちとはずいぶんちがう。年輪のように刻みこまれたしわが、榎木と同世代であることをしめしている。だが彼は、榎木とはちがう。同じ人種ではない。明確に一線を画する存在だった。

角刈りにした髪、細面で頑固な横顔。険しい視線が、盆の上に最後に残った筒を見つめている。二度、頭をさげた。剣道の師範のように機敏で、油断のない動きだった。榎木とは、なにもかもが異なっていた。決意も、意志も、いままで送ってきた人生も。

榎木は急速に、自信が萎えていくのを感じた。あの男、多賀隼人の前では、自分はただの冴えない、無力で、無能で、孤独な人間でしかない、それを痛感させられる。嫌というほど思い知らされる。事実、状況ひとつみても多賀とは雲泥の差だった。多賀が神人になることを望まない、そんな住民は生稲市にはいない。市議会までが、多賀には例外を認めて御籤なしに神人に選定されるようにしたらどうか、そんな議題を真剣に論議した。しかし、多賀は議決前にそれを断ったという。すべて定めどおりにおこなってこそ意義がある、そう申し立てたらしい。そんな潔さ

も、榎木にはない。欠落していた。欠点だらけの人間。それが自分だと悟った。いまの自分自身、そこにどんな価値があるだろう。ただ無為なことに首をつっこみ、もがき、苦しむ。底無し沼に足をとられた家畜のような存在。そう自覚した。

町ぐるみで後援会ができている多賀とはちがい、榎木は孤独だった。ここにきたのも、たつたふたりのためだった。しかも、そのうちひとりはこの世にはいない。あとのひとりは女の子だった。外見は子供っぽいが、じつはとうに成人している女の子。隣りの茶髪とは逆の特徴を持つ、稀有な女の子。腕は細かった。手も小さかった。彼女ひとりで、榎木を底無し沼から引っぱりあげることはできないだろう。運命の底無し沼。おぼろげにそれを意識した。

咳ばらいがきこえた。榎木は顔をあげた。ひろびろとした拝殿のなか、正面に神主がいる。こちらに背を向けて座している。神主の肩越しに、白いものが浮かんで見える。拝殿の外の暗闇、巨木に縛られたしめなわだった。儀式の開始以来、神主はいちども振り向くことはなかった。ただひたすら、しめなわを見つめていた。

「では」神主は背を向けたままいった。老いた涸れぎみの声だった。「各人のお名前をおだしください」

殿^{おとぎ}かだが、土着の訛りがあつた。ここにいる若者たちが七五三詣を迎えたころには、すでに神主をつとめていた、それくらいに年代だろう。

白装束の男たちが、腰帯にはさんだ小さな紙片をとりだす。榎木もそれにならつた。手がかじかんで、思うように動かない。苦勞しながら紙をひろげた。薄い和紙に、榎木康之とだけ書いてある。今朝、自分で書いたものだった。何十年かぶりに筆を握った。それを目の前に置いた。右

隣りをみた。茶髪でピアスの若者が書いた名前は平凡だったが、字はうまかった。きようにそなえて練習したのだろうか。榎木の書いたもののほうが、はるかに子供っぽくみえた。

巫女がいった。「お名前を、筒のなかにお入れください」

指示にしたがって、おのおのが筒の蓋ふたをあけた。紙片を折りたたんで筒のなかに入れる。蓋はぴたりと閉じた。右端から、また巫女がまわって盆の上に筒を回収していく。今度は、おじぎをしなくてもいいようだった。左端で多賀の筒を回収すると、巫女は多賀の前に盆を置いた。

神主はまだ背を向けていた。巫女が指示をする。「筒をまげて、隣りへ送ってください」

多賀がいくつかの筒を動かしてから、右隣りの男の前に盆を滑らせた。その男がまたおなじようにする。榎木の前までまわってきた。まるでデンスケ賭博だな、そう思いながら、九本の筒を適当に入れ替えた。唯一賭博と異なるのは、自分が当たるよう願っていないこと、それに尽きる。

そう、それが自分の本音なのだ、そうさとした。神人の候補に名乗りをあげたことで、自分の肩の荷が降りることを望んでいた。くじで落選したが、自分は精一杯やった、そう言いわけもできる。あのふたりに対してではなく、己れの罪悪感から逃れるための言いわけ。候補者が九人いることもわかっていた。九分の一。自分が選ばれる確率は低い。それは多賀にとっても同じことだった。ほかのだれかが選ばれる、榎木と多賀以外の誰かが。九分の七の確率だ、そうなるか考えるのが筋だろう。ならばいちおう、安堵あんどはおとずれる。荒波への出航を断念して、かえってほっと胸をなでおろす。これはそういうものかもしれない。情けない話だ、そう思った。確率にたよった解決策。消極的で、投げやりで、中途半端で、ことなかれの。賛美どころか軽蔑されるべき、忌み嫌われるべきスタンス。榎木はそれを選んだ、そういうことになる。だが、榎木にとつ

て人生とはそういうものだ。失望から挫折、後悔、そして沈黙。ことの流れはすべて、始まる前から決まっている。運命、そう言い換えることもできる。必ず同じところをつたう。雨水が土の上に溝を描く、次に降ったときも同じ溝をたどる。人生もまったく同じだった。

巫女は神主同様、こちらに背を向けて座っている。くじの公平さを期すためだろう。盆が右端に行きついた。それを察したかのように巫女がふりかえった。榎木はおどろいた。が、すぐにそれが的外れだとわかった。巫女は盆を滑らせる音が九回きこえるまで待っていた、それだけだった。

巫女の白い手がさらに筒をまぜる。それが済むと、盆を手にして立ちあがった。高々と掲げながら、能のような摺り足で神主に近づく。ふたたび正座して、盆を神主のすぐ後ろに置いた。神主がふりかえった。老齡の、やせ細った神主だった。九人の御霊に幸あらんことを。そういったわきに置いてあつた器に櫛の小枝を入れ、盆の上に被った。水しぶきが飛んだ。清めの塩湯だった。人間ではなく、筒を相手に修祓をするとはめづらしかった。九人がまだ候補者にすぎないからだろう。名前を封印した、候補者の御霊はあそこにある、そういうことだろう。神人に選ばれた人間には、改めて正式な修祓が待っているにちがいない。

だれも頭をさげなかった。ただ固唾を飲んで、成り行きを見守っていた。

神主は天井を仰いだ。盆の上には目を落とさなかった。無造作ともいえる動きで、一本の筒をつかんだ。

満ちていた潮がひき、海が穏やかさをとりもどすように、ことが静かに終わっていく。それを、榎木は願っていた。心から祈っていた。ほかの八人とは、正反対の祈りにちがいない。

神主のほっそりとした指が、筒の蓋をひらき、紙片をとりだした。この寒さにあっても、神主の手の動きはなめらかだった。毎年、同じ季節、同じ場所で、同じ動作をおこなう。それが数十年つづき、意識せずとも動いている。そんな感じだった。ややもつたいたをつけた間のとり方も、その長い経験でつちかわれたものかもしれない。左右の白装束たちがひきこまれてるのがわかる。空気にただならぬものを感じる。八人の鼓動が一体となって、耳もとに鳴りひびいてくる、そんな気さえた。

榎木が感じているじれったさの正体は、彼らとはちがつていた。はやく終わらせてほしい。ただそれだけだった。家に帰って、椅子に座り、足を投げだしたい。熱いコーヒーが腹の底に沈んでいくのを実感したい。そして、ホープのキングサイズを、肺いっぱい吸いこみたい。ふつうのホープより二ミリグラム多いタールの個性的な味わいが、胸の奥でぴりぴりとした刺激を放つのが感じたい。独りきりだが、そこには自分の時間がある。他人と関わりあうことで生じる、さまざまな軋轢^{あつれき}が排除される場所。生活の場であり、仕事の場でもある。ほかにはなににもいらない。思いがつのと、半ばそれを実感しているような気分になる。榎木はそんな境地にあった。心の半分以上は、家に帰っていた。底冷えのする吹きさらしの拝殿にいながらにして、暖かい部屋のなかにいる感触があった。

それがどれくらいの間つづいたのか、さだかではない。

神主の声が拝殿に響き渡った。「榎木康之殿」

暖房のきいた部屋の幻想が消えていき、ゆっくりと現実がそれにとってかわっていった。

紙片を手にした神主の目が、榎木に向けられていた。さっきまで無表情だった神主の皺だらけの顔に、かすかに表情がうかんでいた。微笑。笑っていた。それがなにを表すのか、榎木には一瞬わからなかった。しだいに状況を把握していった。祝福の笑みだった。

沈黙した。拜殿を冷たい風が吹きぬけた。気温が急にさがったように思えた。

両わきの白装束たちから失意の溜め息が漏れるなか、榎木の心もおなじように沈んでいった。俺なのか。

吐息が漏れた。それが白いかたまりになって目の前を漂った。ホープの煙とはちがう。なんの味もしなかった。ただ、冷気が胸の内部を凍てつかせるだけだった。

巫女が神主の手から紙片を受け取り、歩み寄ってきた。榎木の前に正座した。紙片を置いた。榎木康之。いましがた目にしたばかりの、子供じみた筆跡だった。巫女が深く一礼した。その顔がゆっくりとあがった。だが、まだ榎木がおじぎをかえしていないことを見てとり、あわててまた頭をさげた。

榎木が礼をかえすまで、巫女はそのままだろう。この儀式は、そこで止まったままになるだろう。ちようど列車がつかえて一時停車したときの、手持ち無沙汰な空気に似ていた。

時間ごと静止してくれるなら、どれだけ楽かわからない。だがあいにく、時は刻一刻と過ぎる。夜は更ける。冷え込みも厳しくなる。そして、ここまできた時の流れを遡ることはできない。

潔さが欠けている。さつきそう自覚した。いまもおなじだった。なすすべもないと知りながら、子供のように抵抗を試みたかった。しかしそれは不可能だった。すべては現実だった。石に刻みこんだ文字のようにくつきりと残っていた。否定はできなかった。拒絶することも叶わなかった。